

知識探訪

多民族社会の横顔を読む

協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

シンガポールのマレー・ムスリムの過去と現在

坪井祐司 (東京外国語大学)

シンガポールのスルタン・モスクの近くにマレー・ヘリテージ・センター (MHC) という施設がある。かつてのマレー王族の邸宅が改装され、2005年に現在の形となった。シンガポールのマレー人に関する資料館であり、文化活動の中心にもなっている。

多民族社会のシンガポール政府は、特定の民族を越えたシンガポール人というアイデンティティーを大切にしてきた。同時に、国家遺産局のもとでは華人、マレー人、インド人といった各民族の文化振興を担う拠点も築かれており、MHCもその一つである。

このMHCにおいて、「発信者の創造：1920～60年代のマレー近代性の印影 (Mereka Utusan: Imprinting Malay Modernity 1920s-1960s)」という企画展示が開かれている (6月25日まで)。これは、20世紀半ばのシンガポールにおけるマレー語の出版業の特集である。展示にあわせて、活版印刷の体験、学芸員によるガイドツアー、子供向けのワークショップなど、様々な関連企画も用意されている。

この時代のマレー語出版物の多くはジャウィと呼ばれるアラビア文字により表記されていた。アラビア文字はイスラム教とともにマレー人に受容された。しかし、マレー半島を植民地化したイギリスはマレー語のローマ字 (ラテン文字) 表記を定め、行政や教育に導入した。これが現在のマレー語のローマ字表記の起源である。ただし、ジャウィからローマ字への転換には時間がかかり、20世紀前半にはローマ字とジャウィが併存していた。1920、30年代にはマレー人の政治的主張が高まってジャウィの新聞・雑誌の発行が盛んになり、戦後になると多色刷りの普及により写真を多用した娯楽色の強い大衆雑誌も現れた。

その後ローマ字にとってかわられ、忘れ去られた状態となったジャウィだが、近年は関心が復活している。世界的なイスラムの強まりのなかでムスリムの文字として、多民族社会におけるマレー人の文化として、ジャウィが見直されているのである。シンガポールでは、1965年の (マレーシアからの分離) 独立以降、一貫して英語を重視した国づくりが行われ、マレー語の出版業は衰退した。この企画展示からは、マレー・ムスリムの伝統としてのジャウィの出版文化を見直そうという意気が伝わってくる。

加えて、展示は科学技術や商業化といった要素に着目した。ポスターには女性とロケットのイラストがデザインされている。マレー・イスラム文化は、植民地がもたらした西洋起源の「近代性」をとりこんだ。大量で安価な新聞の発行には印刷技術が、読み手の増加

には教育の普及による識字率の向上が不可欠であった。ジャウィは王族や宗教家の手を離れてジャーナリズムの媒体となり、都市の消費社会のなかで大衆化した。ムスリムによる政治的主張とカラフルな女優の写真や電化製品の広告がマレー語を通じて結びついたのがこの時代であった。大英帝国の拠点だったシンガポールがマレー語出版活動の中心でもあったことは偶然ではない。



企画展示の様子。ジャウィの雑誌の炊飯器の広告 (1962年) とその現物が展示されている (筆者提供)

宗教と科学技術や商業化というテーマは「現代性」も持っている。ムスリムが外部から先端技術を取り込む過程は、インターネットを通じてイスラム運動がつながり、ファッションや金融などの分野でもイスラム化が進む現在の状況とも重なる。宗教とは政治や科学などすべてを包み込むものであり、古い伝統ではなく常に

最新の状態にアップデートされ続ける。IT先進国のシンガポールのマレー・ムスリムがかつてのマレー語の言論の場の近代性に注目したことは、この地域の宗教のあり方を示しているともいえよう。

< 筆者紹介 >

1974年生まれ。東京大学大学院人文社会系研究科博士課程修了、現在は東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所研究機関研究員。専門はマレーシア近現代史。イギリス植民地期におけるマレー民族の形成過程を研究しており、ジャウィの出版活動はテーマの一つ。